

# アーヴェーシャと阿尾奢， そしてアビシャ/バク

——“仏教東漸”と言われていることの実態——

小林 信彦\*

A<sup>1</sup>

## 真理を身体とするブッダ

紀元前6世紀後半のインドに“シャーキヤ”(śākya)という小さな部族国家があり、その王子として生まれた人がブッダ(buddha)になりました。さて、ブッダになった以上、心が「煩惱」(kleśa)と無縁であるのは言うまでもありません。では、身体も同じように煩惱と無縁なのでしょう。この問題につきましては、“シャーキヤ-ブッダ”(śākya-buddha)の身体は、超人的な属性や機能を備えていて、「煩惱」とは無縁である”という考えが仏教史の初期にありました。ブッダの全存在が完全であるという立場からすれば、そのように考えるのはもっともです。

しかしながら、シャーキヤ-ブッダの心が「煩惱」と無縁であるにしましても、身体を持つ人間として生きている以上は、存在そのものがほかの人間の感情を刺激するのは避けられません。シャーキヤ-ブッダの姿を見るだけで、女が夢中になって心を乱すこともあれば、男が腹を立てたり蔑

---

\* 本学文学部

キーワード：タントラ仏教，シンボル操作，偉大な太陽，唐代の占い，平安時代の医療

んだりして心を乱すこともあります（『阿毘達磨大毘婆沙論』卷四十四）。そうしますと、シャーキャ-ブツダの全存在が完全であるとは言えなくなります。シャーキャ-ブツダの心が「煩惱」を完全に断っているとはいえ、その身体はほかの人間の「煩惱」を増幅させることがありえるのです。

そこで発想の転換が行われました。生物学的存在としてのシャーキャ-ブツダから真理と超人的機能が切り離されて、「煩惱と無関係に存在するブツダ」が別に想定されたのです。これは“真理を身体とする[ブツダ]”（dharmakāya/法身〔佛〕）と呼ばれました。蛋白質や脂肪から構成される身体ではなく、真理と超人的機能だけから構成される身体が考え出されたのです。“真理と超人的機能が擬人化され、ブツダに見立てられた”とも言えましょう。

## A<sup>2</sup>

### シンボルを操作してブツダになるプロセス

ところで、大乘仏教（mahāyāna）では“誰でもブツダになる可能性がある”と言われていています。ただし、これには二つの条件がついています。自ら知恵を磨くことと、他の人々がブツダになるように助けることです。誰でもブツダになれると言っても、無条件でなれるわけではなく、こうして二つの面で長く努力を続けなければならないのです。

どれくらい長く努力を続けなければならないかと言いますと、ブツダになる決心をしてから少なくとも $3 \times 10^{31}$ カルパ（kalpa）はかかるとされています（Abhidharmakośabhāṣya ad 3.93d-3.94a）。1カルパは一つの宇宙が発生してから消滅するまでの時間であり、 $432 \times 10^7$ 年と言われます。したがって、 $3 \times 10^{31}$ カルパは $1296 \times 10^{37}$ 年ということになります。なお、インドでは身体が死んでも「心」（vijñāna）は次々と新しい身体へ移転して存続し続けますから、時間切れの心配は全くありません。

これだけ長きにわたって「心の移転」を繰り返し、ブッダを目指して頑張るのです。こういうわけですから、シャーキャ-ブッダの時代から今日まで2500年の間、ブッダになった者は一人もいません。そして、今から一億年や十億年くらい経ったところで、ブッダになる者は現れないのです。

1296×10<sup>57</sup>年にもわたって同じようなことを続けるのですから、かなり気の長い人でないと勤まりません。中には少し気の短い人々もいたらしく、ブッダになるための準備を効率化しようとする動きが時々ありました。そこで考え出された方法の一つが「ブッダの国」(buddha-kṣetra) へ行くことです。そこでは生きることに伴う苦しみが全くありませんので、ブッダになるための準備活動に集中できますし、何よりもブッダの直接指導が受けられますので能率が大いに上がります。この方法を打ち立てたのは浄土経典です。もう一つはシンボル操作によって一挙にブッダになる方法です。

シンボルを操作してブッダになる方法を探った人々は、「真理を身体とするブッダ」を“偉大な太陽”(mahāvairocana/大日)と呼びました。「あらゆるものを隈無く照らす真理」の比喩です。この人々がシンボル操作によって目指したのは、ブッダに見立てた真理「偉大な太陽」でありました。この「偉大な太陽」は真理そのものですから姿も形もありませんが、これを象徴する記号が定められています。

さて、インドでは人間の行いが三つの局面でとらえられます。身体を動かすことだけでなく、心で思うことも言葉で表現することも、行いと考えられているのです。そこで、ブッダになるために象徴記号を扱う場合も、三種類の記号が設けられています。すなわち聴覚記号と視覚記号と心理記号がそれです。

聴覚記号は音声で表され、「偉大な太陽」を象徴するのは“vam”という音節です。視覚記号は手の指で示され、現代のインドでも演劇や舞踊で用いられています。「偉大な太陽」の場合も、独特の指の組み方がシンボ

ルとされています。また、心理記号は円や三角など、心に浮かべる図形です。シンボル操作をしてブッダになろうとする人々の間で、「偉大な太陽」を象徴する特定の図形記号が約束事として決められているのです。

「偉大な太陽」を象徴する音声を発し、「偉大な太陽」を象徴する形に指を整え、さらに「偉大な太陽」を象徴する図形を心に浮かべる。これがブッダになるためのシンボル操作です。象徴を使って「偉大な太陽」の真似をして、「偉大な太陽」そのものになろうとするものです。この方法でブッダになれるとすれば、大乘経典で提示されている二つの条件はもはや不要になります。知恵を磨く必要もなくなり、他の人々がブッダになるのを助ける必要もなくなるのです。自分がブッダになりさえすればよいのでありまして、他人がブッダになろうとなるまいと知ったことではありません。この意味でシンボル操作を開発した一派は、妥協の余地なく大乘仏教と対立します。

インドの正統派であるヒンドウイズムでも異端派である仏教でも、象徴を操ることによって見えない最高存在に対処する技術が開発されました。そして専門の文献が数多く作られて象徴記号が記述され、シンボル操作の実践に必要な事項が規定されました。この種の特殊な文献が“tantra”と呼ばれることから、「象徴を用いて究極目標に達しようとする技術の体系」は英語で“tantrism”と呼ばれ、この方法を採用した仏教の一派を“Buddhist tantrism”（タントラ仏教）と言います。

### A<sup>3</sup>

#### 「偉大な太陽」であるという自覚を持つための訓練

シンボル操作によってブッダになろうとする者は、まず「私は偉大な太陽である」という自覚を持たなければなりません。この自覚を持つ方法として考案されたのが“アーヴェーシャ”（āveśa）と呼ばれる手続きです。

“アーヴェーシャ”という語は「はいり込むこと」という意味です。何がはいり込むのかと言いますと、「偉大な太陽」がはいり込むのです。「偉大な太陽」が自分の中にははいり込んだというヴァーチユアル・リアリティをもたらし心理操作と言えましょう。こうして「私は偉大な太陽である」という自覚が十分にできた上で、いよいよタントラ仏教の実践が始まります。この自覚を欠くと、シンボル操作は実際の効果がなく、単に形だけのものとなります。このように、シンボル操作によってブッダになるプロセスで、アーヴェーシャは入門過程で欠かせない手続きなのです。

ブッダになるためのシンボル操作は、好き勝手にやって成功するものではなく、この道に精通した人について正しい訓練を受け、細かい技術を身につけ、定められた手順を覚えなければなりません。そこで師匠を選んで入門を願い出るわけですが、師匠の立場からしますと、訓練に先だってまず弟子に要請しなければならないのは、「私は偉大な太陽である」という自覚です。この自覚がないまま、シンボル操作にいくら励んでも、物まね芸でしかありません。

このように、アーヴェーシャは極めて重要なプロセスであり、これを抜きにしては、ブッダになるためのシンボル操作を身に付けることが不可能です。したがって、タントラ仏教の入門に際して必ず行われるのがアーヴェーシャなのです。この場面を描写した箇所は、インド文献『タットヴァサングラハ』(tattvasamgraha/金剛頂經)のあちこちに数多く散在しています。

なお、入門希望者の身体にはいり込むものとして、「偉大な太陽」のほかによく名前が挙げられるのは「真理-人間」(vajrasattva/金剛薩埵)です。これは「偉大な太陽」に準じる存在です。「真理を身体とするブッダ」である「偉大な太陽」は、生物学的な存在ではありませんので発声器官がありません。したがって、人間たちに真理を伝えることができません。

そこで構想されたのが「真理-人間」です。

インドで“vajra”という語が指す「ダイヤモンド」は、一般に「この世で最も堅いもの」になぞらえられますが、ここでは「何物によっても破壊できない堅固な真理」の比喩です。したがって、「真理-人間」を意味する合成語“vajra-sattva”は、「真理 (vajra) であり、かつ人間 (sattva) であるもの」を指します。これは人間としても機能しますから、真理を伝えることができます。「真理-人間」のヴァジュラサットヴァは「偉大な太陽」と人間世界との仲介者なのです。

## B<sup>1</sup>

### 超自然存在が子供に入り込むプロセス

「はいり込むこと」を意味する“āveśa”に、中国人は「阿尾奢」/「阿尾舍」[a-<sup>m</sup>biuəi-ʃia] を当てて漢字で表記しました。中国で“密教”と呼ばれたタントラ仏教が紹介されて、この分野のインド文献が数多く中国語に訳されていたのです。

『タットヴァサングラハ』の中国語訳『金剛頂經』には、弟子を入門させるに当たって行われる「阿尾舍」について記述があり、“真理-人間ヴァジュラサットヴァを弟子の身体に入り込ませて、弟子と一体化させる”とされています。その基本文献『金剛頂經』は、中国で「密教」を専攻する者にとっては基本文献でありましたので、入門の際に行われる「阿尾奢」/「阿尾舍」の重要性について、少なくとも建前の上では広く知られていたはずです。

しかしながら、シンボル操作の訓練を受けるに先だって欠かせないアーヴェーシャにつきましても、中国人がこれを実践した事例が中国文献に見当たりません。もっとも、外国人の記録ではありますが、日本の空海が師匠の恵果の略伝を書いた際に、「阿尾奢」に言及しています（『秘密曼荼羅

教付法傳』卷二)。ところが、皇帝の命を受けて恵果が実践した「阿尾奢」というが何とも奇妙なもので、「魔醯首羅天」が登場して「童子」に「遍入」するのです。そして、皇帝がこの「天」に質問して、「三世事」や「帝王曆數」について教えてもらいます。

空海が長安で習った恵果は、シヴァ（魔醯首羅-天）を呼び出して子供の身体に入り込ませ、未来を予言させているのです。「阿尾奢」を実践したと言っても、これは壮大な呪術でありまして、シンボル操作の訓練に先だって行うべき作業とは何の関係もありません。何しろシンボル操作を習得するのに不可欠なアーヴェーシャについて何も知らず、これと何の関係もない未来予言の呪術を“阿尾奢”と呼んでいるのですから、もし空海がでまかせを言っているのではないのなら、長安で苦労して見つけた「密教の正統継承者」は、シンボル操作について全く無知であったということになります。

そして、こんな指導者についたことを悔やんでもいけませんから、空海もシンボル操作について何も知らず、関心すらなかったということになります。空海が恵果を師匠として選んだ理由はただ一つ、中国に「密教」を導入したと言われる不空の弟子であったからです。帰国後に空海は恵果を不空の「正嫡」とし、「密教伝承の第七祖」としました。自分自身を「第八祖正嫡」とするためです。ところが、実際に第七祖となったのは慧朗でした（『大唐興善寺故大徳大辨正廣智三藏和尚碑銘并序』）。そして、空海が長安に着いた時、不空の後継者となった慧朗は27年前に死んでいました。

ところで、中国語で伝わる文献の中に『速疾立驗魔醯首羅天説阿尾奢法』があり、男女の子供に「聖者」をはいり込ませて未来のことを語らせると言っています。この場合に“聖者”という語が指すのは、「徳と知恵が完全な人間」ではなく、「超自然力を備えた存在」でありまして、人間ではないものです。

この文献によりますと、中国人が“阿尾奢”と呼んだ呪術で、侵入させられているのは「聖者」でありまして、「偉大な太陽」や「真理-人間」ヴァジュラサットヴァではありません。そして、侵入先は子供の身体でありまして、シンボル操作によってブッダになることを志した者ではないのです。

さらに注目すべきことに、「聖者」でも子供でもない第三者がいて、このプロセス全体を取り仕切っています。ここで主役となるのは呪術執行者なのです。未来のことなど、人間の力では得られない情報を得ようとして、この呪術執行者は子供と「聖者」を道具として使っているのです。これはタントラ仏教のアーヴェーシャと似ても似つかぬものであり、このようなことに言及する文献はインドに残っていません。アーヴェーシャから着想を得て、中国人が開発したのでありましょう。

タントラ仏教のアーヴェーシャは、シンボル操作を学ぼうとする入門希望者が自覚を持つために行われます。側に師匠がいますが、その目的は新入りの弟子に自覚を持たせることに尽き、自分自身はアーヴェーシャから何かの利益を得るわけではありません。アーヴェーシャはあくまでも入門者の意志に添って行われ、誰かに強制されるものではありません。

ところが中国で開発された「阿尾奢」は、子供の希望に添って行われるのではなく、「聖者」の希望に添って行われるのでもありません。すべては呪術執行者の目論みに添って行われるのです。“阿尾奢”という名前は、「はいり込む」という意味と共に、確かにタントラ仏教から継承されています。しかしながら、継承されたのはそこまでです。はいり込むものを「聖者」とするもの、はいり込み先として男女の子供を選ぶもの、呪術の執行に先だって子供を沐浴させたり香を付けさせたりするのも、インドに起源を求めることはできません。

古代の中国で行われていた先祖祭祀では、先祖の霊が子供の身体にはい



り込んで、子孫を祝福します。先祖の霊のはいり込み先を“尸”と言います。男の霊には男の子供が「尸」として用意され、女の霊には女の子供が「尸」として用意されます（『儀禮』, 「土虞禮記」: 男男尸, 女女尸）。この際に、子供の身体に侵入するのは父の霊ではなく祖父の霊です（『儀禮注』 ad 「特牲饋食禮」: 太夫士以孫之倫爲尸）。このように、先祖の霊が男女の子供にはいり込むことは、中国の文化伝統に深く根差しています。アーヴェーシャから「阿尾奢」への転換は、このような文化圏で起こったのです。

## B<sup>2</sup>

### 超自然存在が子供の口を借りて未来を占う呪術の開発

「阿尾奢」に言及する中国語文献で、この「聖者」はガルダ (garuḍa) ということになっています。これは猛禽類をモデルにして想像された鳥であり、世界中の鳥の王とされています。インドネシア航空の会社名はこれから取っています。インドでこの鳥はヴィシヌ (viṣṇu) の乗り物にすぎませんが、中国文献では使用人の役目も与えられていて、主人のヴィシヌの代理として人々の面倒を見えています。ヒンドウイズムで親しまれている神々や想像上の動物などは、仏教にも採り入れられてブッダの教えを防衛する役目を与えられていますが、異形の猛禽類ガルダもその一つです。ブッダの教えを防衛する超自然的存在の資格で「阿尾奢」に関与すると中国で考えられたのでしょうか。

さて、中国で作られた文献に“速疾立驗魔醜首羅天説阿尾奢法”というのがあります。表題に“魔醜首羅” [mua-hei-ʃiəu-la] という語が見えます。これは“maheśvara” (<“mahā+iśvara”: 「偉大なシヴァ」) を漢字で表記したのですが、最後から2番目の母音 [a] が写されていません。“阿” [a] を入れて [mua-hei-ʃiəu-a-la] とでもすべきでした。

この文献によりますと、人々の求めることをよく処理するという点で、

ヴィシュヌは自分の使っているガルダを評価しながらも、対応の遅いことが不満で、シヴァ（śiva）に相談します。そして、求めに応じてシヴァがガルダに説いたのが「阿尾奢」であると言います（『速疾立験魔醯首羅天説阿尾奢法』一卷）。このように発案者のシヴァから直接教えを受けたガルダは、「阿尾奢」の第一人者ということになり、迅速に予見することができるようになったわけです。そして、ガルダは超自然的存在として人間の身体にはいり込み、未来を予言することになったのです。

7歳か8歳の男女の子供で身体に傷痕がなく利口なのを数人選び、吉日に「阿尾奢」を行うわけですが、その際の式次第について詳細な規定が設けられています。うまくことが運ぶと「聖者」が子供の身体にはいり、質問に答えて未来に起こることを語ります（『速疾立験魔醯首羅天説阿尾奢法』一卷）。このように、シヴァが教えた「阿尾奢」は、未来を予言するための呪術であり、ブッダになろうとする入門者に課せられるアーヴェーシャとは、目的を全く異にします。

未来予言のための「阿尾奢」に言及する文献がかなり多く残っていることから見ましても、この種の呪術は中国文化圏でかなりの需要があったものと考えられます。そして、このようなものが“阿尾奢”と呼ばれていたとすれば、そして「密教」の行事と考えられていたとすれば、中国で行われていた「密教」もかなり怪しげなものであったようです。少なくとも、ブッダになるという仏教の究極目標とは縁のないものであったと言えましょう。

子供を使う「阿尾奢」に言及する中国語文献にも、はいり込む者を「真理-人間」とするのがあります。『守護國界主陀羅尼經』に描かれる「阿尾奢」では、「真理-人間」ヴァジュラサットヴァが男の子と女の子にはいり込んで、「三世」すなわち過去・現在・未来について語ります。“真理-人間”と呼ばれている存在は、人間として機能する真理であり、すべてを完

### アーヴェーシャと阿尾奢, そしてアビシャ/バク

全に知っていますから、過去・現在・未来について語ることができます(『守護國界主陀羅尼經』卷第九)。この「真理-人間」は侵入させられる「聖者」に過ぎません。設けられている状況はシンボル操作と関係がないのです。

“恵果が行った「阿尾奢」では、シヴァが子供の身体に侵入させられて未来を語った”という文章で(『秘密曼荼教付法傳』第二), 空海はでまかせを言っているのではなく、中国で言われていたことを正しく伝えているのです。空海の伝える恵果の「阿尾奢」が『速疾立驗魔醯首羅天說阿尾奢法』とわずかに違うのは、シヴァの役割だけです。恵果の「阿尾奢」では偉大なシヴァは子供の身体に侵入させられますが、『速疾立驗魔醯首羅天說阿尾奢法』ではこの技術の開発者です。

アーヴェーシャの重要性を知らなかった恵果は、タントラ仏教の素養のない人でありました。そして、その恵果の教えを受けた空海は、『金剛頂經』を始めとして、タントラ仏教の文献を数多く日本に持って帰りましたが、アーヴェーシャを体験しておりませんので、シンボル操作を習得することはありませんでした。タントラ仏教とは無縁であったのです。

### B<sup>3</sup>

#### 仏教の主旨に関係なく効用が拡大する呪術

このように「真理-人間」のヴァジュラサットヴァが登場することもあるのですから、中国で「阿尾奢」と呼ばれる予言呪術は、確かにタントラ仏教のアーヴェーシャから着想を得ています。しかしながら、ここで「真理-人間」にはいり込まれるのは、四歳ないし八歳の子供でありまして、ブツダになる決意を固めているわけではありません。それどころか、「真理-人間」が体内に留まっている間、子供は意志を奪われているのです。

このように、はいり込まれる子供の意志に関係なく行われるわけですか

ら、「真理-人間」が関与するとはいえ、この場合もブッダになることとは無関係です。ここで「真理-人間」は未来を知る能力を利用されているにすぎないのです。仏教でアーヴェーシャを行う目的はただ一つ、ブッダになることです。したがって、ブッダになろうとする積極的な意志が当然の前提となります。ブッダを目指す者がどこにもいないとすれば、「真理-人間」の関与があったとしても、それはもはや仏教のアーヴェーシャではありません。

せつかく「真理-人間」が登場しても、ブッダになることに関心がある者はどこにもいないのですから、「行いと報いの対応法則」は眼中にないということになります。「過去と現在と未来」を指す“三世”という語が用いられることがあっても、仏教文献から借りた慣用表現にすぎず、関心はもっぱら未来にあるのです。

ブッダになることに関心がないとしますと、はいり込むのが「偉大な太陽」や「真理-人間」である必要もなくなり、予知能力のある超自然的存在なら何でもよいことになります。こうして、ヴィシュヌの代理ガルダが、「聖者」と呼ばれる超自然的存在として登場します。そして、過去現在未来にわたって情報を提供していた「真理-人間」に代わって、もっぱら「未来の善悪と災祥」について語り、「三世」すなわち過去・現在・未来にわたる時間の流れについては語らなくなります。ガルダが「聖者」として登場する「阿尾奢」には、「行いと報いの対応法則」に関心を抱く者が関与していません。実際、中国文献『速疾立驗魔醯首羅天説阿尾奢法』では、「阿尾奢」の説明を始めるにあたり、“未来の事を知らむと欲せば”と言って、この呪術の目的が未来情報の獲得にあることを明らかにしています。

はいり込むのが「真理-人間」であろうとガルダであろうと、子供を使う「阿尾奢」は最初から未来情報を取るだけのために開発された呪術です。

「行いと報いの対応法則」には関心がありませんので、知ろうとしているのも遙か未来の生涯のことではなく、数カ月後の収穫状況や商品価格、災害の有無や人間の生死などが関心の対象となるのでしょうか。こうして、シンボル操作を開発した仏教の最先端技術からヒントを得て、中国人は自分たちの生活に役立つために新しい占い呪術を開発したのです。このように、ブッダになろうと志す人々によって行われるアーヴェーシャが流用されて、未来予知に有効な呪術が開発されました。そうしますと、未来予知以外にもこれを利用しようと思いつく者が現れるのは自然の成り行きでありましょう。

中国の「阿尾奢」についてさらに注目すべきは、中国で編纂された『守護國界主陀羅尼經』に見られる記述です。まず未来予言のために行われる正統な呪術の執行について説明した後で、「鬼神」が取り憑いて病気になった場合の対処法について付記しています。そのような場合には、“聖者”と呼ばれる超越的存在は子供の身体に入り込みます。そして子供に柳の枝を持たせ、地面に「鬼神」の絵を描かせて、その胸や背中を激しく打たせます。すると、病人は泣き喚き頭を叩いて助けを求めます。柳の枝でひどく打たれた「鬼神」が病人の身体を借りて激痛に反応しているのです。最後にこの「鬼神」は病人の口を借りて“再び来ない”と誓って立ち去ります。とたんに病人は回復します（『守護國界主陀羅尼經』卷第九）。

未来に起こる災いについて警告を発するだけであった超越的存在は、ここではすでに起こっている災いに対処しようとします。子供の身体に入り込んで、病人に取り憑いている「鬼神」と闘って打ち負かすのです。こうして、予言のための呪術は病氣治療用に転用されることがあるわけです。

このように「阿尾奢」を治療用に転用することは、かなり盛んに行われたようですが、中国仏教の主流から見れば望ましいことではなかったらしく、贗寧は特に意見を付して“超自然的存在を子供にはいり込ませて治療

を行う者がいるそうだが、これで金儲けをするのは嘆かわしいことだ”と  
言っています（『宋高僧傳』第一）。

## C1

### 日本で病気治療のために開発されたアビシャ/バク

さて平安時代の日本では、二種類の超自然的存在が病気を引き起こすと  
考えられていました。一つは“ジャキ”（邪氣）と呼ばれるもので、悪意  
に駆られて行動する習性があり、常に人間に危害をもたらします。ジャキ  
が人間の近くへ来ると、その邪悪な力が作用して、人体が正常に機能しな  
くなります。なお、日本ではジャキが近くにいると病気になるのでありま  
して、身体にはいり込むと病気になるのではありません。

ジャキが人間の近くに留まる限り病気は直らないのです。そこで病気を  
直すには、ジャキの活動を停止しなければなりません。そして、ジャキが  
いたたまれないような状況を作りだし、二度と近づかないと約束させな  
ければなりません。このように、病気を治療する決め手は、ジャキを第三者  
の身体に閉じ込めて身動きできないように拘束することです。

病気を引き起こすもう一つの超自然的存在はカミ（神）であり、機嫌が  
良いと人間にとめどなく利益をもたらしますが、ひとたび怒り出すととん  
でもない危害をもたらします。カミを怒らせて病気になった場合は、ひた  
すら機嫌を取り結ぶしかありません。これを“ホフラク”（法樂）と言  
います。仏教術語の“法樂”は「真理を知る喜び」を意味しますが、日本語  
で“ホフラク”は「カミやホトケを喜ばせること」を意味します。治療技  
術としてのホフラクは、「カミやホトケのご機嫌をとって病人の側から去  
ってもらうこと」でありました。

ところで、清和の時代（858-876）に天台宗の相応がアビシャ（阿比舎）  
を行っています（『拾遺往生傳』下巻、第一話「相應傳」：有勅行阿比舎之

法)。この相応は極めて優秀な呪術執行者であり，“10回も唱えないうちに呪文が有効に機能して，[ジャキを]男の子二人の身体の中に縛り付けた”(loc. cit.: 誦呪未及十遍 呪縛於二人之童男)と言われます。

相応はここで病気治療の呪術を行っているのです。その頃の日本で病気を引き起こすのは，超自然的存在でありました。これが側にやって来ると，人間は病気に罹ります。これに対処するには，特殊な能力を備えた者が当たります。呪文を唱えて超自然的存在を第三者の身体に縛り付けて，その活動を停止するのです。相応が縛り先の身体に使ったのは，二人の男の子でありました。

相応がアビシャを行う話はさらに先があり，興味深い展開が見られます。呪術を使って身動きができないようにした後で，その正体を知りたいと思った相応が尋ねると，意外なことに“私は松尾明神だ”という答えが返ってきたのです。ジャキであると思って子供の身体に閉じ込めたところ，実はカミであったということになります。

カミであると分かっていたら，別の対処の仕方があったわけで，アビシャではなく，ホフラクを採るべきであったのですが，この相応はカミに対してもアビシャを行うことができたわけで，呪術執行者としての卓越を強調するのに効果があったとも考えられましょう。いずれにしても，病気に対処する場合はジャキが原因であると決めつけることはできず，カミが原因である可能性も考えなければなりません。

さて，アビシャを採用して病気治療を行う場合，ジャキの侵入先とされるのは，病人とは別の者です。ところが，もっと古い時代にはジャキを病人の身体に閉じ込めていました。体内に閉じ込められたジャキの苦しみを受けて，病人が狂乱状態になりますから，病状はさらに悪化することになります。それに，特に病人が高貴な身分である場合，これは畏れ多いことです。そこで治療用呪術の改革が求められました。

日本人がこの改革を行う際に示唆を得たのは、中国文献『守護國界主陀羅尼經』からでありました。この文献に見られる付加的記述によりますと、超越者が子供の身体に入り込んで、病人に取り憑いている「鬼神」を苦しめます。超越者が入り込んだ子供が絵の中の「鬼神」を打つのです。病人の口を借りて「鬼神」が敗北宣言をしますと、たちまち病気が直って病人はすっかり元気になります。

日本人はここ記述の中から「子供を連れて来て病気治療に関与させる」というアイデアを取り出しましたが、日本で子供の身体に入り込むのは「聖者」ではなくジャキです。小さい身体に押し込められてジャキは苦しみます。このようにして、患者を苦しめることなく病気を治療する方法が開発されました。病人以外の人間を用意するようになったのです。相応の話に登場する「二人の男の子」がそれです。

こうして、ジャキを第三者の身体に閉じ込める新方式の治療法が確立しました。この際にジャキを閉じ込めることを“バク”（縛）と言います。『拾遺往生傳』の「相應傳」で“呪縛於A”（呪術を使ってAの中に縛る）と言っているのがそれです。『拾遺往生傳』の「相應傳」では“アビシャ”という語が用いられていますが、これはむしろ例外でありまして、“バク”という語が使われるのが普通です。また、この新しい治療法でジャキの取り付き先となる人間を“ヨリマシ”（憑座）と言います。相応の話では「二人の男の子」がヨリマシとして使われています。

## C<sup>2</sup>

### タントラ仏教に無関心な空海

当時の日本で病気治療に携わっていたのは、ミッケウ（密教）の文献を読むのに熱心であった人々でありました。この治療用呪術の改革に当たって、この人たちが注目したのは、「阿尾奢」について記述する中国の文



献でした。こういう事情のもとで日本人が興味を持ったのは、多くの中国語文献で「阿尾奢」の本来の目的とされる予言よりも、特定の文献で二次的な目的として付記されたものでありました。

治療法をなんとか変えなければならないと焦っていた時に、病人にジャキを入れるのは良くないと思いつづけていた時に、たまたま『守護國界主陀羅尼經』を読んでいた人の目に留まったのは、片隅にあった小さい記事「子供を登場させて鬼神を追っ払わせる話」でありました。

恵果の略伝の中で「阿尾奢」に言及した空海は、多少の勘違いはあるにしても、『速疾立験魔醯首羅天説阿尾奢法』に見られる記述を知っていました。シンボル操作の訓練に欠かせないアーヴェーシャには関心がなかったにしても、中国で開発された予言用呪術の「阿尾奢」のことは、空海の念頭にあったのです。ところが、その後の日本ではアビシャを予言に使うことが話題になることはありませんでした。

日本人の関心はもっぱら日本医療の改革にあり、異文化圏で行われている事象を体系として取り入れるつもりはありませんでした。『守護國界主陀羅尼經』を読んでも、中国人が開発した「阿尾奢」体系の全体には関心がなかったのです。こうして、この文献で「阿尾奢」論の中核を成す「未来予言のために行われる呪術」は無視されました。そして、ついでに書き足した「子供を登場させる記事」が取り上げられました。しかも採用されたのは「子供が登場して悪鬼を追っ払う」というアイデアだけで、「地面に描いた「鬼神」の絵を柳の枝で打たせる」というアイデアは採用されませんでした。

このように、『守護國界主陀羅尼經』を作った中国人の意図さえ眼中になかったのですから、遙かかなたにいるインド人がアーヴェーシャについて何を言っているように、全く知ったことではありませんでした。タントラ仏教のアーヴェーシャに関心を向けなかった空海は、象徴操作によってブ

ツダになろうと試みることはありませんでした。822年に日本政府は空海にミツケウの実践施設を創設させましたが、その時に申請を認可した政府の文書が残っています。

去年の冬に雷あり。恐らくは疫と水有らむ。宜しく空海法師をして東大寺に於て國家の爲に灌頂道場を建設せしめ、夏中及び三長齋月に息災増利の法を修せしめ、以て國家を鎮めしむべし。(『類從三代格』二)

空海に期待されていたこと、そして空海が期待に応じて実践したことは、ワザハヒ（災）を除くために“ミツキャウ”と呼ばれる最先端技術を駆使することに尽きました。空海が象徴操作によってブツダになろうと試みたことを伝える記録はどこにもありません。そして空海はミツキャウの技術を弟子たちに伝えようと努力して成功しました。空海の弟子たちが書き残した文献は、すべてワザハヒ除け呪術の実践に関するものであり、象徴操作によってブツダになる方法を扱ったものは一つもありません。

タントラ仏教の基本文献『タットヴァサングラハ』の中国語訳『金剛頂經』の重視を標榜しながらも、中国帰りの空海の創設した真言宗では、この文献で展開されるタントラ仏教の体系に関心を寄せる者は一人もいませんでした。タントラ仏教が日本に採り入れられることはなかったのです。そして、平安時代の日本で開発されたミツキャウは日本独自の文化なのです。

## The Indian Word “Āveśa” As Adopted by the Chinese and the Japanese

Nobuhiko KOBAYASHI

Derived from the verbal root “ā-vis” (to enter), the Sanskrit noun “āveśa” means “entering.” And Tantric Buddhists often use it as a technical term. Then, who “enters” in their texts? In Tantric Buddhism, the personified truth is called “Mahāvairocana” (the great sun), and it is this Mahāvairocana that is expected to enter the mind of a Tantric applicant.

The word “āveśa” is transcribed in Chinese as “阿尾奢” [a-biwei-fia]. Paying no attention to the original meaning of the word, however, the Chinese developed their own story, in which a superhuman enters the body of a child and prophesies the future. The Indian initiation of a Tantric trainee is converted into an augury performance in China,

Having adopted the Chinese loan word “阿尾奢,” the Japanese utilized it as a form of medical treatment. In order to cure a patient of a disease, they bring a child so that a *zyaki* (邪氣 evil spirit) may enter its body. Trapped in the small body of the child, the spirit suffers a great deal and runs away. Then, the patient is free from the disease.

The Indian word “āveśa” has travelled through China to Japan. However, this does not mean that Buddhist Tantrism has made the same journey.